

誰が告ぐるとは  
曾根崎の森の下風音に聞え。  
取伝へ貴賤群集の回向の種。  
未来成仏疑ひなき恋の。  
手本となりにけり。

近松門左衛門作『曾根崎心中』より



元禄十六年(一七〇三年)四月七日、堂島新地天満屋の遊女「お初」と内本町平野屋の手代「徳兵衛」が当社「天神の森」にて情死する事件が起こった。これを近松門左衛門が『曾根崎心中』として劇化、大評判になり当社にも参詣回向の老若男女が大勢押しかけた。以後、人々は当社を「お初天神」と通称するようになった。  
広く民衆の涙を誘うこの作品は、その後も繰返し上演され、今日でも回向とともに、恋の成就を願う多くの人々が参詣している。なお、昭和四七年七月には「曾根崎心中 お初 徳兵衛 ゆかりの地」と刻まれた石碑が設けられ、その後三〇一年を経た平成十六年には、周辺を再整備し二人を偲ぶブロンズ像が建立された。



## TSUYU TENJINSHA SHRINE Popularly Called "Ohatsu Tenjin"

### History

Much of what is today metropolitan Osaka was, in ancient times, but a part of Osaka Bay with scattered islands. On Sone-su - one of the bay's tiny islands - was enshrined the deity that is today the principal object of worship at Tsuyu Tenjinsha Shrine. After land reclamation in the 11th century incorporated that island into the mainland, a village named Sonezaki was established and the shrine became the guardian of the community.

In late 19th century, a railway station - today's JR Osaka Station - was built to the north of the shrine with the result that the area around the shrine became the main gateway to Osaka. Nowadays, Tsuyu Tenjinsha Shrine - popularly called Ohatsu Tenjin - is venerated as the guardian shrine of the surrounding area.

### Origin of the Official Name Tsuyu Tenjinsha Shrine

Early in the 10th century when Kyoto was the capital of Japan, Sugawara Michizane, a leading court scholar who at the time was the Minister of the Right (udaijin), was exiled to northern Kyushu as the result of being falsely accused. On his way from Kyoto to Kyushu, Michizane - who is venerated as the patron saint of scholarship - visited this shrine where he composed the poem "My sleeve is soaked with dew formed by the tears I shed recalling Kyoto." As the word "dew" is translated as "tsuyu," this is the origin of the shrine's official name.

### Origin of the Popular Name Ohatsu-Tenjin

The word Tenjin in the name of a shrine indicates it is dedicated to the deified spirit of Sugawara Michizane as the patron saint of scholarship. The popularity of Ohatsu results from a sewa-mono (Drama Of Contemporary Life) entitled Sonezaki Shinju (The Love Suicides at Sonezaki) written by Chikamatsu Monzaemon for the puppet theater (bunraku or ningyo joruri). This work relates the tragic late 17th century love story of Tokubei, a shop clerk, and Ohatsu, a courtesan, who were driven by a friend's betrayal to commit suicide in the woods within the shrine's precincts. The drama created such strong sympathy in those days that numerous worshippers were attracted to the shrine with the result it gradually began to be called Ohatsu Tenjin.



# 露 天神社

(お初天神)



## 由緒略記



# 露天神社 (お初天神)

## 御祭神

少彦名大神  
大己貴大神  
天照皇大神  
豊受姫大神  
菅原道真公  
境内末社  
金刀比羅宮  
水天宮  
開運稲荷社

祭日	
歳旦祭	一月一日
節分祭	二月三日
例大祭	七月二十日
秋祭	十月二十日
除夜祭	十二月三十一日



## 由緒

### 御本社

創建以来一千三百年の歴史を持つ古社で、「難波八十島祭」旧跡の一社である。曾根崎・梅田地域の総鎮守として現在も崇敬を集める。



社伝によると、当社は上古、大阪湾に浮かぶ小島の一つであった現在の地に、「住吉須牟地曾根ノ神」を祀り御鎮座されたと伝えられており、「難波八十島祭」旧跡の一社である。曾根崎(古くは曾根洲と呼ばれた)の地名は、この御神名によるとされている。

創建年代は定かではないが、「難波八十

島祭」が文徳天皇の嘉祥三年(八五〇年)にまで遡ることができ六世紀の欽明天皇の頃には形が整っていたとされることから、当社の起源もその頃と推察できる。

なお、承徳元年(一〇九七年)に描かれた「浪華の古図」には、当社の所在が記されている。

南北朝期には「曾根洲」も漸次拡大し、地続きの「曾根崎」となった。この頃、北渡辺国分寺の住人・渡辺十郎源契・河原左大臣源融公十一世渡辺二郎源省の末や渡辺二郎左衛門源薫ら一族が当地に移住し、田畑を拓き農事を始め、当社を鎮守の神とし曾根崎村を起した。

以後、明治七年(一八九四年)の初代大阪駅、明治三八年の阪急電鉄梅田駅の開業などとともに地域の発展に拍車がかかり、当社も大阪「キタ」の中心、梅田・曾根崎の総鎮守として崇敬を集めるに至っている。

注1「難波八十島祭」  
古代難波において、王権のもとに執り行われた最も古い祭祀とされ、奈良時代には即位儀式の一環として、即位の翌年に、天皇自ら難波の海辺に行幸し斎行されていたと考えられている。

## 社名の起り

菅公が当地で詠まれた御歌

「露と散る涙に袖は朽ちにけり

都のことを思い出ずれば」に因る。(その他諸説有り)

昌泰四年(九〇一年)二月、菅原道真公が筑紫へ左遷配流される途中、福島に船泊まりされた折に、当社東方に伽藍を構える「大融寺」に船頭茂大夫の案内でご参詣の道すがら、当地で、右の歌を詠ぜられた。この故事にちなみ露天神社と称すると、伝えられている。(「摂津名所図会」に記載の説)

なお菅公は、元和八年(一一六二年)三月に、二郎左衛門九世の孫・渡辺新兵衛源尋が、大阪夏の陣の兵火で焼失した当社社殿を再建するとき、その御霊代として後陽成天皇より御神名御宸筆を賜り

相殿に合祀された。

◆『摂陽群談』では、入梅の時期に祭礼をすることから「梅雨天神」と称するという。また、他説では梅雨時期になると清水が湧き溢れる井戸(注2)が境内に存することによるとも伝えられている。

注2、浪速七名井神泉「露の井戸」

真水の少ない大阪で、周辺地域のみならず社地横を通る旧池田街道を行き通う人々にとっても、貴重な井戸であった。

梅雨時期には清水を地上に湧き出したりと伝えられ、当社社名の起りともいわれる。境内に現存するが、水量は少ない。

